

婦人七徳

第六卷 第三號



東京 弘道館

香

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者諸君の質疑照會に應ず、

但返信料を要す。

本誌は又一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手摺歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但投稿は、凡べて左の規則によること。

- 一、用紙は、白紙、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーター會へ向け何ヶ月分加纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊五厘づゝの割合です。

明治三十九年三月二日印刷
同 年三月五日發行

不許
複製

發行所 東京市麹町區富士見町六丁目十番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發賣所 金昌堂

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

◎ 新 刊 發 賣 ◎

女子高等師範學校教授
附屬幼稚園主事

中村五六先生著

保 育 法

全 壹 册
定價金八拾錢
郵 稅 八 錢

フレーベル會員及本廣告封入御注文者は郵税を要せず

幼稚園は何を爲すべき處なるか、保育の順序
方法如何にあるべきかの問題は須らく世の
父兄及教育家の詳知すべきに屬せり、殊に
籍小學教師に於ては、且深く趣味を有せざるも
保園教育法を研究せざる可らず、即ち幼稚園
の以上之良教師たるは此の必要に應ぜん爲に斯
べし。依りて本社は此の資格を缺くものといふ
運の大家中先生は多年女子高等師範學校に於
蓋し先先生は多年女子高等師範學校に於
にありて、親しく幼保の任に當り、尙幼
育學の講坐を擔任し、且所説の實際を講述せ
を以て尤よく其の特色を益すべし
園の弊根を打破し、將來如何の改良を爲すべ
ざるかを説き、幼保の趣味を興ふるに可
りて存す。思ふに幼保の趣味を興ふるに可
て眞個に其本分を全うし、一層の趣味を以て
童教育に從はんとせば、本書は當に其羅針盤た

第一編 本書要目

- 第一編 保育の意義 ● 保育の必要 ● 幼稚園に對す
- 一般の所見 ● 女子教育に於ける保育の關係
- 幼稚園教育の家庭及學校教育との關係
- フレーベル小傳 ● 學問の修習 ● 職業の
- 家庭の狀況及勢力 ● 學問の修習 ● 職業の
- 幼稚園教育の目的 ● 幼兒の活動遊
- 幼兒の意義 ● 教育の目的 ● 幼兒の活動遊
- 幼兒の教育 ● 教育の目的 ● 幼兒の活動遊
- 保育の本旨 ● 幼稚園とは何ぞ ● 保
- 要旨 ● 幼稚園の事項 ● 手技
- 遊戲 ● 唱歌 ● 談話 ● 恩物の
- 遊戯 ● 唱歌 ● 談話 ● 恩物の
- 恩物の數及別 ● 恩物用法 ● 種類 ● 恩物の
- 幼稚園の經營 ● 恩物 ● 幼稚園の編制 ● 幼
- 幼稚園の設備及衛生 ● 保母 ● 保母の注意すべ
- 幼稚園の設備及衛生 ● 保母 ● 保母の注意すべ

附錄 ● 救急要具 ● 學校傳染病及消毒法

前付の一

發兌元 東京日本橋區表神田區保町壹 (發行所) 國民教育社

筆主士學文井鹽授教學大子女本日

藝文子女

(毎月一回)

(一日發行)

誌友會規定無代割引券郵券二錢御送附あれ
進呈す割引券ば直に二十枚送る

到る所婦人女學生間の讀物として好評嘖々たる本誌

第二號の如何に發展かせる見よ

本誌は多く言はず唯本誌が如何に現今女學雜誌の群を抜いて世人囑望の多大なるかは請ふ全國の新聞雜誌界の批評の聲に聞け

第二號要目

高雅なる娛樂
單獨生活の遊戲
武士的教育的家庭に就て
育兒の注意
家庭の花
新曲の花
新曲の花
星同の樂譜話

坪内逍遙
島田三郎
湯川武比
石原政比
松浦雨江
鹽井規矩
白井太郎
木暮理太郎

籠の鳥
二十三夜討
小川のさん
花母さん
乳歌の庵
和歌選釋
婦人論梅の花
英會話の墓

中大高西安明醉山關
村田春雨
和梅建
石靜醉
石村梅建
石村梅建
石村梅建
石村梅建

女子文藝和歌、俳句、新體詩、論說、敘事文、抒情文、書簡文、川柳、一口嘶、狂句、等

女子文藝卷頭畫(太郎)口繪(彈原蕉園)寫眞版(數入)

表紙(紫式部)

其他(三郎)

口繪(彈原蕉園)

寫眞版(數入)

定價一册拾錢

郵稅一錢

四册前

八册五錢

拾六册外郵稅一錢宛

文藝趣味と家庭趣味と併て味せば本誌を讀め

發行所 東京東海堂 石堅北隆飾 小堅北隆飾 京久堂 東京東海堂 日本書會 店誌雜籍書各他其堂月良

前付の二

婦人と子ども第六卷第三號目次

子ども

ダイヤモンドと蛙……………倭の翁……………頁一

退屈しのぎ……………ひさ子……………二

四つの銅像……………太田龍東……………二五

婦人と子ども

子だから……………東牧羊……………三〇

忙中閑語……………天紅……………三三

實驗上の育兒……………醫學博士 瀨川昌耆……………三四

幼稚園の保育と家庭の保育……………和田實……………三九

婦人と親族法……………太田英隆……………三二

靴屋の子ども……………米溪……………三五

貞一の日記……………其母……………三七

述懐……………豊洲……………四〇

短歌……………真宮起雲……………四一

俳句……………鹽野奇零……………四三

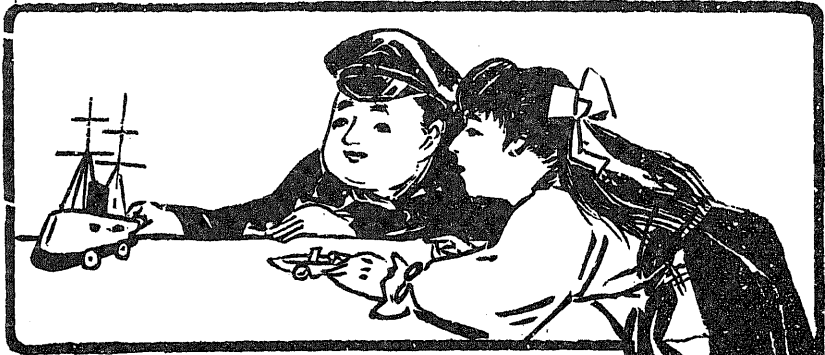
時雨日記……………在米國 かなん……………四三

保育問答…………………………四九

新刊批評…………………………五九

雜報

會報



もど子と人婦

號參第卷六第

もど子

ダイヤモンドと蛙

倭翁

五十子さんと、雪子さんとは姉妹でしたが、どうしたのですか、五十子さんは、小さい時分から、意地悪で我儘で、自分よりか年下の雪子さんを、苛めることな

ども度々でした。

夫ですから、近所の人達も、誰だって、五十子さんを可愛がるものはありませんで、皆雪子さん雪子さんといって、雪子さん許りを可愛がってくれました。

今日も、おっ母さんが、五十子さんに、

「五十子や、お前向ふの井戸へ行って水を一杯汲んできておくれ」といひつけますと、五十子さんは、

「はい、たゞ今」

といつて、手桶をさげて門口まできました。が、そこまできてから、そつと、雪子さんを召んできて

「雪さん、雪さん、あのおっ母さんが言ひましたよ、雪さん行っ

て水を汲んでき

なさいって」

といひますと、

雪子さんは柔順

ですから、

「あら、姉さん、

そうでしたか」

と、大急

ぎで手桶を五十

子さんから貰

てかけて行きま



雪子

した。すると、

五十子さんは

「水なんか、私

汲まないわ、こ

んな事は雪さ

んにさせれば

いよのたもの

と獨り言を言

ひながら、此

方の方へ来て

横になつたな

り繪本など見て遊んで居ました。

で、雪子さんは井戸へ行つて、一生懸命になつて水を汲んで居ますと、そこへ、一人の汚い乞食の様な老婆さんがやつて参りまして、

「もしく、どうか其水を一杯私に飲ましてくれませんか」と申します。雪子さんは、誰にでも親切なよい娘ですから、

「まあ、澤山お上り、今汲んであげるから」

といつて又一杯奇麗な水を汲んで、夫をお老婆さんのさし出したお碗に入れてやりました所が、お老婆さんは、

「やれくありがたうございます。」

といつて、甘相に、ぐいぐいと飲みました。で、雪子さんは始か

ら、このお老婆さんを汚い乞食見たいなお老婆さんだと思つて居たのですが、眞實は、これは乞食ではなくって、神様であつたのです、神様が、こんな風に態と變つてきて、雪子さんが、どんなによい娘であるかといふのをお試しなされたのでした。それですから、お仕舞に、お老婆さんのいふには、

「あゝ雪さんや、お前さんはこんな汚い貧乞婆にまで、そんなによくしてくれたから、私もお前さんに御褒美をあげる事にしよう。で、お前さんがいつでも親切な言を言った時は、其度に、お前さんの口から、ダイヤモンドだの眞珠が飛びだしてくることにして上げよう」。

雪子さんは、これを聞いて、まあ不思議なことをいふお老婆さん

だこと、思おもつて、ひよいと見みると、もう何處どこへ行いつたか見みえませ
んでした。

夫それから、水みづの手て桶ばを提たげて、家うちへ歸かへつて參まゐりますと、おお母かさん
は、雪子ゆきこさんが水みづを汲くみに行いつたことは知しりませんで、ややつぱり
何處どこかに遊あそんでゐるのだと思おもつて、ささつきから探さがして居ゐた所ところでした
から、今いま雪子ゆきこさんが水みづを提たげてきたのを見みて、

「おおや、雪子ゆきこさん、お前まへ水みづを汲くんできたのですか、五十いそさんに言いひ
つけたのだのに、五十いそさんはどうしたんだらう、

といいつて、とうとうく五十いそ子こさんの遊あそんでゐるのを見み付つけて、又また、い
つもの様さまに、五十いそ子こさんが、ズルをして、年下としだの雪子ゆきこさんを使つかつ
たのだと思おもつて、五十いそ子こさんを叱しかりにかかゝらうとしますと、雪ゆき

子さんはすぐ姉さんをかばって、

「あのね、おつ母さん、五十子さんがさつき汲みに出様としたのを、私代って上げたのよ、

といひだしますと、不思議じゃありませんか、雪子さんの口から、ダイヤモンドだの、眞珠などが、幾つもく飛びだしてきました。之を見て、五十子さんもおつ母さんも吃驚しました。で、雪子さんは、さつき井戸側でお老婆さんのいったことをお話しますと、五十子さんは、じつと夫を聞いて、

「それじゃ、明日は私が屹度汲みに行ってよ、

といつて居ましたが、夫から明日になりますと、誰もいはない中に、五十子さんは獨りで、一番大きな手桶を下げて家を出ました。

然し、其手桶が中々重いので、五十子さんは引きずり、引きずり提げて行きました。が、一體が我儘です。から、もう肝癢がおこつておこつて堪らなくなりまして、で、

やつと井戸側まで

行つて、荒っぽく、

ガチヤンくさせ

て釣瓶から水を汲

んで居ますと、そ

子さんは、手桶が重くつて、

腹がたつてならない所へ、お老婆さ

んでなく、乞食老爺さんが出てきたもんです。から、一層腹がたつ



來まして

「お嬢さま、どうぞ

私に其水を一杯のま

してくれませんか」

といひました、五十

て

「知らないよ、誰がお前見たいな乞食に水を上げるもんか、お前に飲ませようと思つて、こゝまで重い目して水汲みにきたのじゃないよ、飲みたけりや、一人で勝手にくんでおのみ、

といつてやりました。所が、この乞食老爺さんといふのは、やっぱり神様で、前のお老婆さんの代はりに今度はお老爺さんになつてきたのでした。夫で、今五十子さんの言ふのを聞いて、

「あゝ、お前さんは眞實に意地悪だ、これから柔順で、親切な娘になるまでは、お前さんの物言ふ度に、口から蛙を出してあげよう」

といつたまゝ、又何處かへ消えて行きました。

で、五十子さんは家へ歸つて、おつ母さんに、其事をお話しよう
 とすると、口からしてぴえんくびえんくと何疋もく蛙が飛
 び出してきます。おつ母さんはいふまでもなく、雪子さんも、吃
 驚して、いろくして見ましたが、五十子さんの意地悪と我儘が
 なほりませんので、いつもく蛙が飛び出してきてゐました。け
 れども、とうくお仕舞には、五十子さんも、あんまり苛くなくて
 参りましたと見えて、餘計な我儘も言はない様になり、夫から意
 地悪も直つてとうく雪子さんの様な柔順なよい娘になりました
 のでやつと、蛙の飛び出るのがやまりましたとさ

めでたしく。

退屈しのぎ

ひさ子

幾日も前から降りつづいて居る雨は、
 今日も止みませぬ、太郎は紙鳶を揚げ
 ることもできず、花子は仲好のポチを
 つれて庭を遊び廻るわけにもまゐりま
 せんから、室内で繪本を見たり、人形を
 排べたりして居りましたが、やがて二
 児はお祖父様のお部屋に行き、
 お祖父様何かお話をして頂戴、
 お祖父様は、

エート、お話も大分種が盡きて來た
 今日は一ツお前達のまだ知らぬ新ら

しい事を教へて上げよう、まづどん
 なのでもよろしいから、蓋のある小
 さな箱を三ツ持つておいで、

と仰いますから、二児は喜んで自分の
 部屋へ飛んで行てチャント三ツ揃へて
 参りました、すると

よし、今度は何か赤と白と青の
 三の球と數とりの物を二十四だけ探
 しておいで、

との事で、二児は又三の球ときしやで
 を二十四だけ持つて参りました、
 之で箱三、球三、數とりの二十四と揃ひま
 してお祖父様はまづ三の箱を前に排べ

て甲乙丙と御記しになりました、そしてクルツと後向になつて眼をつぶつて仰いますには、

俺は今こうして其方を見ないで居るからお前達は三色の球を別々にどの箱にでもお入れなさい。

それで二兒は甲箱に青、乙箱に赤、丙箱に白と入れてチャンと蓋をいたしました、お祖父様は、

入れたかネ、今度は赤を入れた箱の前にきしやごを一ツ、白の箱の前に二ツ、青の箱の前に三ツ置いて御覽二兒は其通りいたしますと、今度は

それから甲箱の前に今ある數と同じ數だけ加へなさい、そして乙箱の前には今ある數の二倍だけ、丙箱の前には今ある數の四倍だけ加へなさい二兒はどういふ事になるのかと思ひながら其通にいたしました處がお祖父様は、サーそれでよいといふので眼をみて此方をお向きになり、のこりのきしやごや排べたきしやごや箱を見廻して首をかしげていらつしやいました、やがて、

ハ、一、お前達は青球を甲箱に赤球を乙箱に、白球を丙箱に入れたネ、

とスツカリ御あてになりましたもので
すから、二兒は大層不思議がつて、

お祖父様は私達が入れる時にソツと
見ていらしたのでせう。

とか何とか申します、お祖父様は

ナーニ、俺はソシナずるい事はしな

いよ、又私の眼はX光線ではないか

ら箱の中までは透りません、それで

もこういふ事を知つて居ればいつて

もチャンと分るのです、お前達も之

さへよくおぼえて居れば三の球をど

の箱に入れたかキツトあたりますよ

と仰つて次の様な表を書いてお見せに

なりました、そうして其理屈は中々六
ケしいとの事でありました、

	(赤)	(白)	
1...	甲	乙	
2...	乙	甲	
3...	甲	丙	
5...	乙	丙	
6...	丙	甲	
7...	丙	乙	

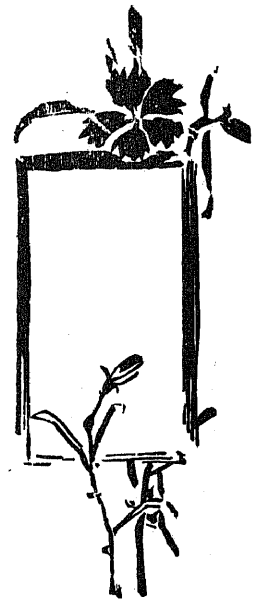
即ち數字は數とりの物の残つて居るの
數を示すのでたつた一ツ残つて居る
時は、赤は甲箱に白は乙箱にあり二ツ
残つて居る時は赤は乙箱に白は甲箱に
あるのにきまつて居るので、残りの數が
三、五、六、七の時は表の通り、そうして
三の球の内赤白の二ツが知れよば、今
一ツの青の所在は自然定まるわけです

から、つまり右の表さへよくおぼへて居れば、数とりの残りの数を見るときにどの箱にどの球と言ひあてられるわけであります。

そこで二兒はおもしろがって代るくに一人は眼をつぶつてあてる人になり、一人はすきな様に三の球を三の箱に入れそれから赤の前に一、白の前に二、青の前に三と置き、更に甲の前に今ある数と同じだけ、乙の前に二倍だけ、丙の前に四倍だけとお祖父様の仰つた様にしてさて、眼をあいて前の表に由りあてて見ますと幾度でもチャンとよ

くあたります、いかゞです、皆様もためして御覽なさい。





四つの銅像

太田龍東

ある夜のこと、上野の公園にある西郷隆盛の銅像が、二重橋の外にある楠正成の銅像の所に往って、

『もし楠さん、私等は恚うやって、夜も晝も一所ばかりに居ては、退屈で仕方がないから、人の見て居ない間に昔話でも爲て遊ぼうではありませんか。』

と申しますと、楠の銅像はニコニコ笑ひながら、

『やあ、誰かと思つたら西郷さんですか。私も淋しくて困って居る所でした、御互に今夜は緩々と話しませう、不錯して大村益次郎さんも嘸退屈で困って居るに違ひないから、之れから、誘ひに往って三人で話さうではありませんか。』と答へました。那麽から一人は九段坂の上に参りまして、

『大村さん貴君も嘸御退屈だらうと思つて遊びに來ました。』と云ひますと、大村銅像は喜びまして。

『御親切に有りがたう、元より私も望む所ですから今夜は緩々遊びませう。しかし、全じ遊ぶなら、先日この隣りに見へた川上さんも誘って上げては什麼ですか。』

と云ひますから、それも宜からうと云ふので、川上大將の銅像を誘ひまして、四人は之れから連れ立って、上野の鶯亭に往つて遊ぶことに定めました。

皆が久し振りの遊びでありますから、怎爲遊ぶなら面白く遊ばうと云ふので、酒肴を注文して大散財を初めました。暫らくすると皆がお酒によって上

機嫌となり、踊つたり飛んだり大さはぎとなりました。西郷銅像は川上銅像に向つて、

『川上さん、貴君一寸詩吟を遣つて下さい、私は之れから劍舞を遣りますか。』と云ひますと、川上銅像は、『よろしい遣ります。』孤軍奮闘圍を破つて出づ』と、

大きな聲で詩吟を遣りますと、西郷銅像は劍を抜いて劍舞を初めました、皆は面白がつて「妙々」と云て手を拍つて賞めます。次ぎには、大村銅像が徳利の尻を箸でたゝいて、

『建武の昔正成は、肌はだの守まもりを取り出いだし、これは一年ねんみせと都みやこせめ。』

と歌うたを謠うたひますと、楠銅像くすの銅像は、頭まに血ちを被かぶてコリヤくと拍子ひょうしを取とつて踊まわり廻まわります、其滑稽そのとうけいな体裁ていさいを見みると、之これが天下てんかの大英雄だいえいゆうの寄より合あかと思おもはれる程ほどであります。

ところが、上野交番所うののこうばんじょの巡査じゆんさが西郷銅像さいこうどうざうのある所迄巡廻じゆんかいして來きますと、西郷銅像さいこうどうざうの銅像どうざうが居いないで只犬ただいぬばかり居かり居かりますから、之これは大變たいへんだとすぐ警察署けいさつしよに知しらせました。すると、二重橋にじゆうばしの交番こうばんからは楠銅像くすの銅像が居いないと知しらせて來きま

した。

又九段またくだんの交番こうばんからも川上かはかみと大村おほむらの銅像どうざうが居いないと知しらせて來きました。さあ怒いかうなると東京市中とうきやうしちゆうは大騒おほさわぎで、各警かくけい察署さつじよでは、四大銅像だいどうざうが夜逃よにげをしたと云いふので、巡査じゆんさは總掛そうがけりで探さがしてゐます。

暫時しばしばすると、大銅像だいどうざうが、上野うへのの鶯亭うぐい亭で散財さんざいを遣やつてゐると云いふ事ことが解わかりました。それで巡査じゆんさが鶯亭うぐい亭の石礎いしだんの所ところまで往いつて見みますと、大騒おほさわぎを爲してゐる音ねがしますから、急いそいで内うちに飛とんで這は入いりますと、四人にんの銅像どうざうは巡査じゆんさを見て喫驚くつきやうして、捕つかつては大變たいへんと周章あはてして逃にげ出だ

しました。

逃げ出したのは好かつたが、餘り狼
 狽たものですから、自己の歸る所を間
 違へて、楠の銅像は上野の西郷銅像の
 台石へ登つて犬を馬だと思つて帖然と
 乗つた。乗つて見ると何んだか變だ。變
 だが關はないで知らぬ顔して濟し切つ
 てゐます。乗り人は那麼でよからうが、
 乗られた犬は堪つたものではありませ
 んキヤン／＼鳴いてゐます。不錯任麼
 する間に西郷銅像は一と息に成つて飛
 んで歸つて見ると、この有様、

『やあ、楠君、君は吾輩の居所を占領す

るとは随分だね。見給え犬は死んで終
 ふよ、可愛さうに。』と

云はれて初めて氣が附いて、

『やあ失敬ッ。』

と云つて、急いで二重橋指して駈けて
 歸りました。

又大村銅像も狼狽へて、川上大將の
 台石へ上つて漸やく自分の所へ歸り着
 いたと云ふ顔付で較安心して、ポット一
 と息してゐますと、川上銅像が額から
 汗を流して飛んで遣て來まして、

『をやッ、大村君、間違るにも程がある
 ではないか、之れは僕の所だよ、未だ君

は酒の酔が醒めないに見えるな。」

と云ひますと、大村銅像は少しくきま

り悪く、

「何ッ、酒の酔は醒め過ぎたが、餘り急

いだものだからこゝで一休みしてゐ

る所さ。」

などと負惜み口上を後に残して歸つて

往きました。之れで四銅像は各自分の

座に着きましたとい。

(完)



(1)	1 1 2 2	3 3 2 2	3 5 5. 3	2. — 0
	チイサキ	アレラニ	ヨキコト	チ
(2)	まいにち	われらを	あいしつ	い
	3 — 2 2	1 1 2 2	5 3 3. 2	1. — 0
	チシヘ	タマヒシ	シノメグ	ミ
	そだて	たまひし	しのなさ	け
	2 — 3 2	5. 6 5 0	3 2 3. 6	5. — 0
	ナガク	トホク	ワスルマ	ジ
	おやの	ごとく	あさゆふ	に
	6 6 1 6	5 — 5 3	2 2 3 2	1. — 0
	オホキク	ナリテ	ノチマデ	モ
	したひて	あふがん		

師の恩

此歌は女子高等師範附屬幼稚園にて一の組に近頃教授しつゝあるものなり

(幼稚園卒業の歌)

婦人と子ども



子だから

東 牧 羊

古來の口碑傳説や歴史などに於て、私共は母親の子に對する至情が、最も美しく發露せる機會を屢々見ることがございます。如何なる暴惡無殘の人といつても、我子に對しては、大抵濃な愛情を表はすの實に、人間の底に奥深く潜んで居る靈性を、天が人の子に依りてこの天地の間に發露せしむるものでありませう。我利我慾嫉妬偏見虛榮言諦あらゆる罪惡の暗黒界の中に於て、一道の人間らしき光明のよく之を照らすものは、實に親の子に對する愛情の發露であります。

私は常に感じます。自分は社會に立ちて何等人から尊敬せらるゝ程の身分もなければ名譽もありませぬ、羨まれる程の財産もなければ學識もありませぬ。たゞ其日其日の職分に追はれて居るのみで、自分の様なものは、存在して居ようが居まいが、一向社會に取つては關係のない言は在る甲斐のないものでありませんが、然も只だ一人、満腔の敬愛を捧げて、自分を何ものにも代へ難い父として信頼するものがあつた。實に子供となつては、自分の様な腑甲斐ないものすら、天地にたゞ一人の父と頼りすがるかと思ふと、吾々凡夫の身では、如何で、子供の爲めに、時々失望落膽に迫らるゝ、自分の精神に鞭うちて奮闘することにもなるのであります。

古來、子供がなくつて泣く人はないが、子を持つて泣く人は多いといふこともあり、随分子故に暗黙に迷うて苦む人もありますが、通例からいへば人は子供を持つて始めて安心することが出来るのであります、子供のない中は、随分冒險もし、輕擧もやつて見るが、さて子供が出来ると自と沈着いてくるのは極めて自然であらうと思はれます。

子供は親に安心を與へる許りではありませぬ。其他に子供から受くる所の賜は、實に多いと思はれます。吾々は子供を持つて始めて親の義務といふことを、十分解して之を實行することが出来ます。吾々育てた親の恩も、我子を持つて始めて十分に理解することが出来ませう。自分を犠牲にするといふ美はしい至情を最も多く顯はす機會を與へるのも子供であります。我利我利亡者の様な人も、子供を持つて

生れ代つた程風情深くなるのも、實に子供の賜であります。夫婦の争ひ、時々は子供から起ることもありますが、然し夫婦の結合を一層強固にするものは子供であります。實に統計上から見ましても、子供を持つたものに犯罪者が少いといふことは事實であります。

かく考へ来りますれば、古人が子寶といつたことも、まことに理由のあること、思はれます。室の美ならんよりも子等の嬉笑なるかなといふ言葉もありませんが、吾々は、子供を持つて、たゞ玩具の様に可愛がる許りではなく、子供から學び得る凡べての賜に留意して、かくの如き子寶を得たることを深く感謝すると同時に、不幸にしてこれを有せざる人々に向つて、深き同情を表せねばならぬと思ひます。

忙中閑語

天

紅

▲高き學校を卒業したりとて、高き教育を受けたりとはいふべからず、高き學問と高き教育とは自ら異なり、學問とは、教育の方便の一なり、學問を授くる學校、必らずしも教育を施す學校と言ふを得ず、今の婦人にして、高き學校に入りて高き學問を受けたるもの、漸く多からんとす、然して、實際の社交上に於て、往々非難を受くる所以のものは、要するに、學問のみを修めて、教育を施されざるに由る。

▲某侯爵夫人、曾て、其親戚に妻を娶りやらんとする時、一切學校出の娘を拒絶せり、其理由に曰く、

聊かの學問をなして、徒らに氣位のみ高く、常識を缺けるが爲めに、社交の實務に通ぜざるが、之等の
人々に多ければなりと。

▲笑ふ門には福來るといふ、然したゞ笑つて居たればとて、何の因縁もなくして福の飛び込み來るもの
にはあらず、これは、常に笑ひ顔をして居れば、心自ら爽快きて、愉快になる、これが福なりといふ
ことなり。人は可笑き故に笑ふにあらず、笑ふ故に可笑しきなりとは、近き頃ある學者の言ひ出でたる
ことなりとか、されば、平素、嬉々として、笑顔をして居れば、心も常に嬉々として愉快ならぬことな
き道理なり。

▲夫と同じく、何も苦しき事もなきに、故らに澁面造り、苦り切つて居る時は、心も矢張り苦々しく不
平不快を感ずるに至るべし、心に喜びあれば顔色爽快に、不平あれば顔色澁る、これ最も睹易きことな
れども、顔附よりして心持を變ずることも亦疑ふべからず。

▲子持てる親、子を育つる教師は、殊に顔付を爽快にして子供に接すること殊に肝要なり。顔附を爽快
にし居れば心も自ら爽快になりて温なる感情もて子供に對することを得べし。由來感情は傳染的なり、
爽快なる人に對すれば己も自ら爽快になり、沈鬱なる人に對へば己も亦沈鬱となる、子供の感情を圓滿
ならしめんとする時は、之を育つる人自ら、圓滿温和なる感情もて、接せざるべからざるなり。

▲ふさわしからぬもの、フロックコートに足駄、丸鬚に鰻茶袴。

◎ 實驗上の育兒(ついで)

醫學博士 瀨川昌耆

生齒と病氣

▲ 増量の割合 哺乳兒の体量の増加は生後最初の六ヶ月はツンツン肥つて早く増量するものであるが、夫れから後の六ヶ月は其の割合に目方が増えない、即ち目方の増え方が遅いのです、ソコで哺乳兒時代の増量の割合をお話し仕て置きます。前にも申した通り哺乳兒時代とは生後一年間位の事であるが月を重ねるに従ひ次第に増量の割合が減じて往く、左に示すは平均一日増量の標準で、之れを御覽になつても生後一ヶ月の平均一日の増量と十二ヶ月目の増量とは餘程比例が違ひます、之れは丹精して哺乳兒の体量を量る親々の御参考にもならうと思ひます

哺乳兒平均一日の増量

二十四

増量	同上日本 の目方	増量	同上日本 の目方
一月 二五瓦	六、八分厘	二月 二三瓦	六、二一分厘
三月 二二瓦	五、九四分厘	三月 二〇瓦	五、四四分厘
四月 一五瓦	四、〇五分厘	四月 一四瓦	三、七八分厘
五月 一二瓦	三、二四分厘	五月 一〇瓦	二、七〇分厘
六月 九瓦	二、四三分厘	六月 八瓦	二、一六分厘
七月 八瓦	二、一六分厘	七月 六瓦	一、六二分厘
八月 八瓦	二、一六分厘	八月 六瓦	一、六二分厘
九月 八瓦	二、一六分厘	九月 六瓦	一、六二分厘
十月 八瓦	二、一六分厘	十月 六瓦	一、六二分厘
十一月 八瓦	二、一六分厘	十一月 六瓦	一、六二分厘
十二月 八瓦	二、一六分厘	十二月 六瓦	一、六二分厘

▲ 生齒と素人の考へ 哺乳兒は一定の標準通り

体量も増え健康で育つて往く内に生齒の時期となり哺乳兒は齒牙が生える様になる、一体此の時期は哺乳兒の身体に稍もすると變調を來すもので、健康な哺乳兒でも機嫌が悪く發熱などして病体に陥ることが有勝つもの、之を生齒困難といひ、齒の生へる時は容易くうまく生へ悪い事を申すのであります、素人の親達は此徴候を齒牙の生へる爲めだ、齒が齦の肉を突破つて出るから哺乳兒は

熱が發たり、機嫌が悪かつたりするのだ、齒の生へる爲めだから、少し位病状を呈しても害はない、驚くには及ばぬと斯う言つて左程心配せぬ人もなるが何うも斯んな考へで安心しすぎて打捨て置いては遂に生命に危険を及す様な事があるので、哺乳兒の爲めには餘程大切な場合であるから、此の生齒時期に病氣の模様が見えたら速に専門醫の診察を求めが宜い。

▲生齒困難の時期 哺乳兒が此一定の時期に發病する原因に就ては近頃醫師の間に種々な議論があつて、説は一定して居らぬが私は實驗上生齒の爲め斯くの如き疾病の起るものでないと信じます、夫れが證據にはまだ齒牙が生へぬ哺乳兒にも斯る徴候を呈する事は往々あるでありませんか尤も或る場合には齒の生へるので其の刺戟を蒙り身

体に斯る變調を生ずる事がないとも限らぬから、兎に角生後四五ヶ月目即ち門齒の生へる頃は母親なり保育者なり毎日哺乳兒の様子に振目なく注意を怠らず、様子が怪しいと思はゞ機敏に夫れを洞察し醫師の診斷を待つて差圖を受けるのが安全の策と考へる、左もなくして萬一油斷をなし俄に客體が變つて悪くなつたら取返しに付かぬ事のある時代です

生齒と病氣

▲生齒の遅き兒 齒牙は一定の規則によつて生へるものであるが、中には變則な生へ方の哺乳兒もある、夫れが證據には出生當時から既に齒のあるものもあるが、之れとても別に氣に懸ける事はない、唯偶然の出來事で、病氣の爲と云ふのでないから……去れど體質の脆弱なる哺乳兒は自

然齒の生へ方も遅い故、若し生へべき時期を經過しても容易に其徴候なき時は或は身体發育上缺點なしとも限らぬから、如斯場合には一應醫師に健康診断を受ける必要がある、古しは齒牙の生へる前には、齒肉を切つて樂に齒の生へる爲めだと云つた時代もあつた、之れは何んの爲めかと云ふに、前回にも申述べた生齒困難の時期には哺乳兒が色々な病氣に罹つて往々生命に危険を及ぼす事さへある此の原因をば齒の生へるので齶の肉を刺劇するため發熱などするので斯う考へて、齒肉を切つたりしたのだケレども醫學の進歩した今日から、是れは誠に愚劣なる手段とより考へられない齒の生へる時の徴候は、熱が出たり、下痢したり、咳が出たり、涎を多く流したり、母親の乳首を噛んだり、ブツブを無暗に吹いたり、甚しきに至つ

ては痙攣たりする事もある、斯ういふ容子が見えたら間もなく齒の生へる事と思ふが宜しい

▲齒牙の生へ方 處で齒牙の生へる時期と其の順序をお咄し致さう、先づ第一に生へるのが下内門齒で之れは二枚眞白い奇麗な齒で、生後四ヶ月から十ヶ月間位迄に生へるのが通常なれど、稀には四ヶ月前にも、又十ヶ月後にも生へる事がある左れと孰れにしても此位の時期なら心配にならぬ第二番目には上内門齒が二枚、之は大略八ヶ月目から十二ヶ月目位の間に生へる、第三番目に下外門齒二枚、引續いて上外門齒同じく二枚、是等は一ケ年の畢りより二年目の五六ヶ月間には生へる事になつて居る、夫れから第一臼齒が四枚生へて次ぎに犬齒四枚、之れは第二年目のなかば過ぎから終り頃迄、第二臼齒四枚が生へるのは第二年

目の十ヶ月頃より第三年目のなかば頃迄、以上斯う云ふ順序に其の時期を考へれば誤りなきに近いのである

▲充分安眠せしめよ 初哺乳児の一般衛生法を

説明する前に、健康なる時の状態を述べやう、不健康なる哺乳児は必ならず此の状態に背いて居る事を心得ねばならぬ、先づ第一は睡眠の事です、

睡眠は發育上尤も大切なことで、睡眠を欠くやうでは、虚弱であるか、病氣があるか、何か健康

を害して居るに相違ない、故に哺乳児は夜分充分安眠し得る以上は晝間幾ら眠つても悪い事はない

安眠し得る以上は晝間幾ら眠つても悪い事はない

安眠し得る以上は晝間幾ら眠つても悪い事はない

安眠し得る以上は晝間幾ら眠つても悪い事はない

安眠し得る以上は晝間幾ら眠つても悪い事はない

う

睡眠と智慧付

▲晝寝 幼生児の間は唯モ一眠つて斗り居るが

哺乳児時代は夫れよりも稍睡眠の度を減する、併し際立つては宜しくないもので夜間は充分に眠り尚

其外に晝間も充分寝なければ悪い、晝寝は凡そ二

回位、一回でも熟睡するなら夫れでも不足はない

のです、万一晝寝をせぬならば四邊を静にして睡

眠を誘うやうにして、爾うして眠らす工夫をせね

ばならぬ、能く哺乳児によつては寝ないと機嫌の

大層悪い兒があるけれど、寝ない哺乳児なら必ず

身体何れの部分にか欠點があつて健体でないと推

案を下さなければならぬのです。

▲睡眠と健不健 處で哺乳児の眠り方があるの

です、何ういふ眠り方なら健体な兒か、又た不健

体の兒か見分けを付けられるのです、睡眠は凡て

深く、穩かに、眠つて居る間の顔を見ると左も心

地よげに愛らしい面色をして居るのは是れ健体なる哺乳兒の眠り方である、然るに是れに反し寢て居ても折々妙な顔付をして、間には笑つて見たり爾うかと思へば、泣出したたり、能く眠つたと思ふと俄に覺たり、斯の如き調子で誠に眠りの穩かならぬは、身体に故障ある睡眠なりと思ひ決して油断してはなりません、母親とか保育者は小兒の一舉一動に就き注意を怠ることの出来ぬもので、如何なる方面からでも病氣の初期や、虚弱なる缺點を屹度發見する事の出来得るものと心得られたい

▲手足を動かす 睡眠の重大な關係に續いて今度は哺乳兒の身体及精神の發育状態を述べやう、生兒が初めて生れたときは手足を屈めて居る、此姿勢は二三週間餘は崩さぬもので、夫れ以後になると初めて手足を伸すものです、一体手足を屈め

て居るのは是れ母親の胎内に居る時の姿勢にて成長するに従ひ、運動が盛んになるが、此運動は哺乳兒に意味のあるものでなく、足をバタ／＼行つたり、手をグ／＼動かしたりするのは全く無意味なる事であり、故に生後二三週間過ぎて手足を動かすやうになれば、絶間なく洗濯に動かし居る方が宜しい、餘り靜止して居るのは却つて虚弱な不健康な兒に多いのです。

▲哺乳兒の智慧付き 夫れから意識的に目の前の物を見、サモ欲しさに手に取らうとしたりする迄には生後三四ヶ月を要します、斯うなると哺乳兒の愛が日に増し加はる、去れども是れより前に眞直ぐに自分の頭を保つやうになるもので之れが生後百日位寢て居ると頭を擡げるには二三ヶ月目の事です、四五ヶ月目に目の前の物を欲しが

やうなときはモー寢して置いても轉げ出します、五六ヶ月となれば打伏になる、實に哺乳兒の育つのは面白い程早いもので、打伏せになれば此時は首を擧げて手足を突張り爾うして多くは後方へ向つて這ひ出すものです (ついで)

幼稚園の保育と家庭に

於ける保育

和田 實

幼兒保育に熟練なる保姆は、屢所々の幼稚園に於て見ないではないが、是等の人々が、皆悉く、家庭に於ても、亦幼稚園に於ける如く、熟練なる手腕を幼稚に對して顯はす否やは、疑問である、幼稚園では、熟練な保姆であつても、家庭に歸ると、年葉も行かぬ子守にも及ばぬ位な保姆が、隨

分ある様です、中には人の子は幼稚園で保育することは出来るが、自分の子を家庭で保育する術は、一向夢中である方も、可なりある様である、番に積木や、ひもや打抜紙等の嚴然たる恩物が、必要ならばかりでなく、机腰掛の設備や、オルガンの備へが無くしては、保育が出来ぬと云ふ厄介な保姆が少くない様である、従つて多くの世人と云ふものは、幼稚園と云ふものが、普通の幼兒保育場即ち人々の家庭に於て、當然行はれなければならぬ所の幼兒保育を行つて居るものであると云ふことを知らないのです、勿論幼稚園には、机も腰掛も必要であり、諸種の恩物もなければなりません、然れど是等の設備が充分に完備しないからとて、二人や三人の幼兒を相手に家庭で數時間の保育が出来ぬ様な事では、保育者としての價値は何處にありま

せう、家庭と云ふ以上は、どんな所にも紙筆鉛筆等の文房具や鉄針小刀の類は申に及ばず木屑竹屑の多少はあるものです、是等を應用すれば立派な保育材料は幾等も得られます、オルガンがないからとて、天然の良樂器たる喉があれば、唱歌の練習には事缺かず、羽子板に紐に毬位あれば、遊戲の數々遊び盡くせぬ位あるでしやうし、おばさん事、お醫者さん事に、禮の遊びも時計の遊びも出來ませう、

要するに、保姆其人の氣轉次第で、保育の材料は、何處の家庭内にも、充滿して居ると云ふことが出來ますのに、之を充分に應用する人がなくて、徒に世人をして幼稚園と云ふものは、特殊の教育所であつて、特殊な仕事を幼兒にさせて居るものであるかの様に、思はせて居つたのは、如何にも遺

憾な事でありませう、先頃伊澤修二さんが我國の幼稚園を評して、「フレイベル式其儘であつて、日本の家庭に不適當であるからいけぬ」と云はれたのも、畢竟此邊の研究應用が足りないからであらうと思ひます、殊にフレイベルの恩物は、何も是が確固不動のもの、決して變改す可らずと云ふものではないので、我々さへも之に改良を施し不適當なるを省き、有益なるは加へて、實行して居るので、決してフレイベル式其儘ではないのです、併し世人の多くが此邊の消息を知らず、幼稚園を特殊の教育場と思ひ誤つて居るのは、詮ずる所、幼稚園の主義、方法を解する母親が少く、保育の精神を家庭に實現する保姆の少さに因るに違ひありません、戦後の日本が既に世界の日本と成りました以上は教育は凡べての方面に發達しなければなら

りませんが、殊に進歩の著はれぬ此幼稚教育即ち保育事業に向つて大なる發展を遂ぐる必要があり

ますから、世の保母たる方々は、出てゝは幼稚園の設備充分な所で、諸種の恩物を以て幼児を保育するの旁、家庭に歸つては、不完全な恩物を用ゐる間に合はせの材料を以ても、如何に幼児を保育し得るかの御研究あらんことを望みます、そして機會さへあらば、其を實行して世の母親に示して保育の精神の何處にも行はれ得ることを示さるゝ様願ひます、

警視總監の第三に曰く

「四才未満の小兒を道路に獨歩せしめざる様父兄に於

て十分監督加へらるゝこと」と

婦人と親族法(續き)

太田 英 隆

第二款 財産關係に及ぼす效力

夫婦は婚姻を爲すに當り任意に其財産關係に付き契約を爲すことが出來ますが、夫婦の關係は専ら情誼に依りて成立するものでありますから、其婚姻を爲に當り一々其財産關係を契約することは困難であります、そうして、その契約をした場合にも其契約に付き一般の契約に關する規定の外別に法律上の制限を設くるの必要がありません。之れ法定の夫婦財産制のある所以であります。

第一項 契約に因る財産關係

婚姻する男女は契約して其財産に關し、相互に有する權利の範圍を定むることが出來ます。そうであります、未來の夫婦は法律の上からして契

約を以て其財産關係を定めるのを強ゆるのではありませぬ、又實際におきまして、婚姻中にこんな契約を爲すの極めて稀なのは、夫婦の結合が情誼によつて成立するからであることを想像しても知れます。それであるから、夫婦間に若しこの契約のなかつた時に於きまして、その財産關係を支配する法規を設け、契約をせない夫婦は、その財産關係につきは法定の制度に従つたものと看做すは當然の理であります。

第一、財産契約締結の時期

財産契約は未來の夫婦間に於てする契約であります。それでありますから、その締結時期は夫婦の婚姻に届出ある前でないならばなりません。この法律の精神は、一度締結した財産契約は婚姻中に變更することの出来ないものとする

三十二
によりて貫徹せられます。夫婦が財産契約をなさず、法定の制度に従つたものと認めたとさきも亦同じであります。

第二、財産契約の効力

財産契約は一般の契約と同じやうに、當事者の間に於ては何等の方式を要せないで、婚姻の届出と共に効力を有します、そうであります。若し其契約が法定財産制と違つてゐるときは之れを第三者又は夫婦の承継人に對抗せうと思つたなら、婚姻の届出までにこの契約を登記することが必要とします。若し之れを其時期までにせないとときは、第三者は別段の契約ないものと看るべきであります。

第二項 法定財産制

法定財産制と云ひますのは、夫婦が婚姻をすま

すとき、その財産關係に付き別段の契約をしな
いときに、法律の規定によつて當然従ふべきもの
を云ふのであります。

第一、婚姻中の費用の負擔方法

夫は婚姻から生ずる一切の費用を負擔せねば
なりません。但し妻が戸主であつたときは妻が
之れを負擔することになつてゐます。

第二、特有財産の使用收益權

夫又は女戸主は、用ひ方によつて其配偶者の
財産の使用及び收益を爲す權利を有してゐるの
です。夫又は女戸主は、其配偶者の財産から生
ずる果實を得ますけれども、もし其配偶者が債
務を負擔するときは、其利息は自分の財産の果
實中から辨濟することを許さねばなりません、

第三、使用貸借に關する規定の準用

夫又は女戸主は使用貸借の借主が、借用物の
通常の必要費を負擔するがやうに、其配偶者の
特有財産の通常の必要費を負擔し、又借主が借
用物を原狀に復して之れに附屬せしめた物を收
去することを得るが如く、夫又は女戸主は其配
偶者の特有財産に工作を施すことなどがあつた
ときは、之を原狀に復して之れに附屬せしめた
物を收去することが出来ます。

第四、妻の財産の管理、

夫が妻の財産を管理することの出来ないとき
は、妻自分が之れを管理すべきものであること
は、民法第八百一條に規定してある通りであり
ます。

第五、妻の財産に於ける夫權の制限、

夫が妻の爲めに借財をなし、妻の財産を讓渡

し之れを擔保に供し、又は第六百二條の期間を越へて其貸貸を爲すには、妻の承諾を得ることが必要であります。但管理の目的を以て果實を處分するのはこの限りではありません。

第六、妻に對する擔保提供の義務、

夫は妻の財産に關し廣大な權限を持つてゐますから、若し夫が其管理の方法を誤つて其財産を無くする様な場合に於ましては、妻は自分が其財産を管理することが出来ませけれども、夫の管理の失當でなく若くは妻が出来兼ねる時に於て、夫の管理權を剝奪せよして別に妻を保護する方法を設けなければなりません。そこで民法では、夫が妻の財産を管理する場合に於て必要であると認めるときは裁判所は妻の請求に因つて夫をして其財産の管理及び返還に付さ、

相當の擔保を供せしむることを得との規定を設けてあります

第七、日常の家事に關する妻の代理權

日常の家事に就ては妻は夫の代理人と看做す。夫は前項の代理權の全部又は一部を否認する事が出来る、但し之れを以て何も知らない他人に對抗することは出来ないとは、第八百四條に規定してある所でありませ。

第八、財産管理の程度

夫が妻の財産を管理したり又は妻が夫の代理を爲す時に於きましては、他人の物だからと云つて粗略にせず、自分の爲めにすると同一の注意を爲すことが必要であります。

第九、委任に關する規定を法定財産制に準用する場合、

民法第六百五十四條及び第六百五十五條の規

定（民法條文參照）は、夫が妻の財産を管理し

又は妻が夫の代理を爲す場合に準用します、

第十、財産權の推定

妻又は入夫が婚姻前から有せる財産や婚姻中

自分の名で得た財産は特有財産となります。夫

婦の孰れに屬するか知れない財産は、夫又は女

戸主の財産と推定します。（續く）

玩弄紙幣六万三千八百七十五圓を所持せる子供は曰

一金五万圓 銀行貯蓄

一金一万圓 生命保険

一金二千九百圓 食物

一金百圓 慈善費

一金八百圓 つかひ物

一金七十五圓 ヒヤノ

靴屋の小供

米 溪

これは予が實際の感懐如何にもと思はれしま
書きつく婦人と子供へとて。

麴町に一軒の小やかなる借店して、靴直しを職
とする夫婦の者あり、ふと通り掛りしまゝに、靴の
磨きを命ずれば、主人の男町嚙に會釋して、掃除
も一通りならず、其の面ざしも由ありげにさへ見
えて、かゝる社會の者には有りがちの疎故なる處
もなく、質實なる様尋常ならざりしが、折りふし
小さき足駄の音忙はしく走せ歸りしは、三歳四歳
五歳とは見えぬ女の兒の、小さき笛を手にするを
吃と見るや、彼の靴工が、忽ちさと氣色變へたる
が、言葉はやさしく、

「其の笛如何せしぞ人の物に非ずや、」

と詰るに、小供は口の中にて何やらん囁くは言
 ひ譯の積りなるべし、母も月棚の後より聲して、
 「笛は家にも在るものを、如何にせしぞ、人の
 物奪るにはあらず、」

と戒むれば、父の靴工は更に又

「奪たにあらずとや、其れならばよし拾うたと
 云ふか、さらばよき様なるが、其は隣りの子のも
 のならずや、假令拾うたにせよ、隣りの子が下さ
 いと云は、必ず必ず渡すべきぞ、」

と云ふ詞も情ありて、嚴に失せず寛に流れず、
 予れ暫時、其の光景の如何にも心ある様に、感に
 堪えて見てありしが、彼の兒は、暫時もぢ、せ
 し後、ツト、走り去りしと思ひしが、間もなく歸
 り來るを見れば、手には曩時の笛も持たず、彼の
 靴工更に其を見て、

「歸して來るか」

と尋ねれば點頭するに母も亦詞を添へて、

「笛は家にもあり、欲しきものは家にて云へ、
 人のものは決して欲しく思ふべきにあらず、」

と戒めつゝ、手箱のうちより小さき笛取り出して
 吹いて見すれば、手をさし延べて請け取りて嬉々
 たり、

予れ此の光景の心ある家庭にも見まはしき様を
 今與行とてもあらぬ、一間間口の借り店の、而も
 靴工の家庭に見るかと思へば、いと其の人柄も
 心掛けも憚ばれて、錢囊より小錢取り出で、

「よく還したり、」

とて與ふれば、父母のものゝいと嬉しげに禮
 云ひながら更に又

「夫れよく還したとて下されしよ、頂け而して

決して人の物持て還るにはあらずよ」

と云ひ足したり。

世には名も知れぬもの、裡にも、徳ある者もあるものよ、之れ果して眞の市井の細民か、世を外にせる徒か、

教ふるにも道あり、正しからざるべからず、導くにも方あり寛嚴宜しきを制せざるべからず、法に泥めば道死し、道に拘はれば人死す、寛嚴は手心なり、方法は規矩なり、泥ます拘はらず、運用の妙存す、人を造るもの、尤も難しとする所なるを、今此の靴工果して何者ぞ 法を持する正にして枉げず、道を行ふこと優にして迫らず、曲げず殺さず以て中道を制す、實に教育の極致を得たるものにあらずや感ずるまゝに記す。

貞一の日記 (承前) (明治卅六年) (五月生男兒)

その 母

明治卅九年一月二日

父と渡部の伯母はんの許へ、年始に行き、百合子さんが、まだ着物もさかへず居るを見て、變なおべ、こわい〜といつて、傍へもよらずやがて、着物をかへたれば、喜んで傍へ行つて、ヴァイオリンを弾かしてもらふ、年玉に反物を、百合子さんに上ると、

これ母さんもらつたのおべ〜といふ、母が他よりもらひし物なりと、いふ意味なり、夜、ランブ臺を見て、ランブの腰掛といふ、

一月五日 此頃唱歌を、自分で作りかへて唱ふ、おとーさん、おかわさん、はやくで、ごらんよの歌を、おぢいさん、おばさん、雀〜の歌の終のさよなら、みなさんチウ〜を、さよなら、貞

チャン、かへりませう、など似よつた、語をばめかへて唱ふ。

一月十日 夕飯の後、父が、變な節で、梅の白妙と、唱ひ出すと、ちがふ〜といつてやめさせ、母にうたはせて、ちがはない〜といふ。

一月十九日 劍を抜いて、進め〜、といふ歌を唱ふ様になりてから、佐々木先生に頂いた劍を、大變好きになりて、外に行く時は、大抵腰に下けて行く。

一月廿四日 此頃、父の不在中、父の兵兒帶を、前かけの上にしめ、チツチャイ、トトサンといつて、父のかへるまでは、どうしてもとらず、チツチャイ、トトサン、と呼べば、キコエナイ、といつて、返事せぬ事あり。

一月廿九日 母が、おうちに、赤チャンが生れて、

母さんが、赤さんと、ねんねしたら、貞チャンは、誰とねるときけば、だまつて居る故、父さんとかときくと、父さんは、一人で、貞チャンと、赤チャンと、母さんとねるといふ、

一月卅一日 ローレイの歌を一番の半まで唱ふ父が唱ふ獨逸語のを、さゝかぢりしなり、

二月二日 繪はがき帖の繪葉書を、一枚〜抜きとり、小兒が浴みして居る圖を見て、コレしいチャンだから歌を教えて上るといつて、豊太閣の歌を、初から終まで、眞面目に唱ふ。

二月六日 此頃は、どういふものか、パンをいやがつて喰べす残す故、今日より飯に代ふ、

朝(七時) 牛乳七五瓦、飯一椀 味噌汁少量
 晝(十一時) 飯、鶏卵(半熟) 一個、磯部せんべい二枚、おやつ(二時) 牛乳七五瓦、バ

ン二切

夕(五時) 飯二碗、煮肉、ウエファース二枚

二月十一日 此頃は十分悪戯を覚え、父外出の時

玄關へ送り出で、父の靴をはいて居る間に、そ

つと、そこに置ける、手袋や帽子を持つて逃げ

て行く、今日は午後父と安田さんが、庭の雪を

掻くを見て。自分も靴をはいて出で、同じ様な

真似をなす。

霜焼けにて、醫者より薬をもらふ。

二月十三日 今日渡部の百合子、遊びに來り居る

時、何時覚えしか、ハイカラといふ語を覚え、

百合子さん、ハイカラ、貞チャンも、ハイカラ

にして頂戴といふ、百合子、自分の櫛をとつて

さしてやりしに、直にとつて捨て、なほ何か取

りて捨てる様な、手付をする故、何して居るの

ときけば、ハイカラする、あゝまだおべゝに

ついてると、拂ひ捨る真似をなす。

二月十七日 父と湯屋に行き、衣服を着る時、男

の子二人、兄弟と見ゆるが、ビヨココ跳ねま

わつて、戯れ居て、弟の方が真一の方へ、近つ

いて來ると、こわいゝと父に抱きつく、家に

かへりても、こわかつたといふ兄さんがどんな

事したときけば、コンナ事といひながら、立つ

て真似をなす。

二月十八日 唱歌を作りかへて唱ふ事大好きにて

いろゝおもしろい事をいふ今日は。

とーさんゝ、はしれ、大きなとーさんは、

たかく、ちいさなとーさんは、ひくゝ、なか

よくあそべ、とかりゝの節にて唱ふ



述 懷

湘波漁夫

富をうらやむことなかれ

自然のらくは貧にあり

玉のさかづきかやきて

盛る酒いかにうまくと

夕がほだなの下すゝみ

まとひたのしきはらからが

くみてすゝむる一ぱいの

にぢりの酒にしかめやも

かれにながむる庭あらば

吾にたがやす田はたあり

かれに乗るべき馬車あらば

われによむべき文はあり

よしもつ筆はほそくと

みさをの節はあるものを

民のあぶらに肥ふとる

はねなき人におとらんや

花のころもはまとなねど

おなじ雲井に澄わたる

月をながむるわれなれば

おのれが運にやすらひて

不正のとみはうらやまじ

不仁のさかえねがうまじ

◎短歌募集

△課題 隨意

△切 毎月末日

△發表 本誌上

△賞品 三光に粗景を呈す

△選評 眞宮起雲

△投稿 用紙は隨意にて左記の所に送らる可し

但添削及返稿を要せらるゝ方は往復はがき
又は切手封入にて送られたし

「伊勢國白子局區内みどり短歌會」

短歌

眞宮起雲選

(天)

京都 中村鶴聲

小さけれど香も色もまた詩の神の召しに榮えむか
露草の花

(地)

紀伊 高木白星

春夕べ袖かみしめて物おもふ少女のかたに紅梅の
ちる

(人)

東京 田邊孝

錦きて歸るとちかひうらぶれて母のみ慕にひと夜
あかしぬ

懺悔の情言外にあふれたり

○

田中三舟

蝶々の軽きつばさに歌のせて春の朝を風ぬるう吹
く

落ぶれて獨春泣く我世とも知らで鶯囀り冴ゆる

○

山翁

さ、川に繪筆洗へば彩なして流るゝ水に梅の花ち
る
金字塔愛の光りに高照りてしこ世の暗を永久に破
るか

○

紫薫女史

美しくしき繪日傘つゞく京の街花のかんばせ袂にゆ
るゝ
宵殿に姫がたしみの琴もれて朧の月に梅の香しろ
と

せめてもの思ひをこゝに忘れんと花ちる宵を泉回
りし

○

大西益子

我悶え神に告ぐれば罪の影漫ろ碎けて雪とぞ消え
な

舞姫の舞ひの手振りに興湧きて立ち去りかねし夜
櫻の宴

春寒う愁ひに沈む籠居や歌思はする紅梅の花

○

田邊孝

うたゝ寝の夢野に舞ひの姫出で、戀の譜歌ふ春の
宵哉

春駒に黄金づくりの鞍おかせ花野かけらば我世も足らむ

○ 林 静 子

夕雲の影を見送りそと泣かむ我運命をば誰が知るらむ

○ 岡 野 艶 子

春寒を柱によりて怨じぬる夕べ漫ろに我身かなしき

○ 吉 川 紅 花

花蔭を除ろ歩みの姫君が元祿小袖風に亂るゝ

○ 長 谷 部 和 子

うち笑まむ笑まひはよしやくも世に入れられで泣かじとぞ思ふ

○ 清 水 光 風

春潮に薫る藻の花白うして朝日うらゝに光りかびぬる

えせ戀をつゝむこの胸われ乍ら悶え焰と身を焼きつくせ

○ 飯 塚 曉 霞

うらゝかに春の日浴びて罪もなく野に戯れし昔か

もほゆ
花かげにちりしく花を褥とし一夜まどかの夢や結ばん

○ 西 尾 無 名

黒髪の長さ思ひに春の夜の月光りなり更けに更けたる

憂ひ子の歌の一ふし好き聲に上しまさなば我願ひたる

○ 高 木 白 星

春風の厚き情にそと笑みて匂ひうつくし紅梅の花朝明けの風は真白き花に見えてまだ閉されし姫の殿居や

○ 起 雲

小さきく骸に執す我世とも知らでえせ詩に年老いにける

夢のごと真白き花につゝまれて點思興ある春のわめつち

* * * * *

フレーベル會俳句集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 毎月二十五日限り

一、披露 翌々月本誌上

一、賞品 三光には繪葉書を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌讀者は何人にてても投吟する事を得

用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物随意)住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

○本誌第一號募集俳句は極めて少數なるため、次號に掲ぐべし

無聊吟社句集

圓山や茶店の旗に春の風	煙村
春寒の鏡の雲や化粧部屋	芋村
春風や雲助唄ふ箱根山	素月

畑打や小石の多き山の裾
 城跡や陽炎もゆる石の上
 一里ほどくれて戻るや春の月
 草も木も眠る姿や春の月
 小座敷に灯火くらさ柳かな
 初午や母の脊中に豆太鼓
 切爪の山を越したる行方かな
 白梅や若さ女の朝詣
 小娘のうた面白し春の宵
 籠提げて戻る女や春の川
 青柳に澁茶もうまし峠茶屋
 春風や風船放つ女の子
 梅散るや修學院に朝の雨
 小さき子の雛抱いて行く隣りかな
 雛古き長者の家や五十代
 梅多き小村に暮れて月明り

坦	山	松	文	天	醉	桂	可	奇	榮	ち	き
々	々	々	久	外	月	川	笑	零	居	よ	よ
										子	女

時雨日記

在米國 おさ ん

一千九百六年一月廿一日

旦那様の御壽命今宵かぎりなりと宣告して、いそがしげに歸り去りしはドクトル、獨逸人なりとかさまで巧みならぬ英語にて、折ふしは見送る吾と笑ひ興ずることさへありしが、今日は恨めしき心地して、『御機嫌よう』も口のうちの戸あらゝかに、うちよりとぞせり。

奥様は談話室の長椅子にうちふして、よゝと泣き沈み玉ふ。おなごさめの言葉もいせず。注射器を熱せんとて、厨下の瓦斯爐の前にたてる看護婦と顔見合せ、同じ想のため息いと苦しや。

午餐の食卓をしつらひて、奥様おこのみのもの二品三品ならべたれど、肉叉をとり玉はず。せめては珈琲にてもと、すゝめまいらせたるを、半ばのみさしてまだ泣き玉ふ。

空かさくもりて、またもしぐれんとす。旦那様の

お寝巻けふ洗ひてぞとにかけ置きたるを急ぎとり入る。

晚餐の卓には看護婦唯一人、カブリツク教徒なり、今宵はいつもの宗教論もせず、『ほんに人生は夢のやうですな』旦那様は人事不省、何のかなしみもないでせうが奥様がね』などしめやかにものがたる。

燈火のつくころドクトル再び来る。窓をうつ雨の音いとすざまじ。

おさんもこゝにこよかし、今宵はお別れなるべければと、奥様の仰せられたれば、旦那様の御枕もとにゆき悲しき想にて御顔を見つむ。すやすやと眠り玉へり。御息の音たのもしげなり。ドクトルの言葉疑はしやと、喜ばしくも思ふ。

室に入りてのちも旦那様のこと、かれよこれよと

想ひ起して眠られず。されど流石に終日の働につ
 かれたればにや、十時の時計をさゝたるのちは、
 いつしか熟睡しつ。

ふと夢さめて枕をかゆる刹那に、奥様のしのび泣
 の聲きこゆ。すはこそと起き出るとき、室の戸を
 叩きて看護婦來る。もの云はぬうちにうなづけば、
 かなたもうなづきかへして、そのまゝ立ち去る、顔
 の色蒼くして、首にかけたる黄金の十字架、手に
 せるランプに、映じてキラリと輝く。あくる日の
 四時半なり、息をひきとり玉ひしは、四時十五分
 なりとか。

廿二日

朝食の仕度してのち、且那様の室にゆくに白き
 巾に御顔を掩ひて、もの静かなる窓のあたり。ど
 ことなく寒き風の吹く心地す奥様は御自分の室に

こもり玉ひて思ふまゝなくめり、且那様の姉君も
 來り、奥様の兄君も來る。

二頭の馬、蹄の音あらくしくわが家の前にとま
 る。葬儀會社の馬車なり。一時間ばかりのうちに、
 浴室にて、且那様のなきからを洗ひきよめ、髻
 を剃り服を着せなどして、櫛下にはこび來る。

談話室にうるはしき寢臺据へられつ、白絹の布團
 ふくよかに、金糸にて繡せる枕いと神々しきが
 上に、さめぬ眠の人とならせ玉へり。カイゼル式と
 かの様に、はねあがりたる髻は、ありし日の散歩の
 御面色、御腕を胸に組み玉ひて、指環の寶石のみひ
 とり輝けど、やさしき御眼は再び開かれず。ア、。

且那様の兄君、奥様の御親族など來る。御ふたかた
 の知己友人など交り交り來る。門の戸には黒き絹
 を結びてかけたり、喪のしるしにや。食堂を客間

に充て庖厨にて食事をなす。奥様常の半ばはど召

しあがり玉ふ。うれし。夕がたに奥様の喪服来る。

女教師仲間の誰彼よりつとどひて着せまいらす。黒

絹にて模様のないものなり。

親類中の美人なりとて、奥様のほめ玉ふお嬢さま

来る。奥様と共に食卓につく。鼠色の服を召し玉

へり。自動車にて訪れし客も四五人ありき。

廿三日

奥様げさは喪服を召し玉ひて、黒き覆面を用ゐら

る。午前は處々より花束来る薔薇最も多し小なる

は花輪の形せるもあり、美しきリボンにてつかね

たるもあり。大なるは日の本の衝立位のものなど

あり。藁と薔薇にて巧みにつくりたるなかに。白

き鳥のとまれるもあり。何れも露重々しげに、か

をりいとめでたし。されどその花のいろいろにか

こまれてさめぬ眠につきつゝある人、あはれ、あ

はれ浮世の花の色香を得知るべしや。ピアノの上

には亡き人の両親の寫眞をはじめとして遺愛の寫

眞を安置せり。寢臺の傍らに美しき帛に掩はれ

し小机ぞ置かれたる。その上は一とまさのバイブ

ル、金縁あざやかにあがめられたり。

午後二時ゆかりある人々よりつとどふ。兩名残りな

く晴れて、そとは日の光まばゆし。されどわが家

はいとしめやかにして、かなたにもこなたにも、

すゝり泣きの聲のみきこゆ。

肥え太りたるは長老なりとか。フロツクコート重

々しく、立ちて寢臺のかたはらにゆき、且那様の

黒き襟飾をときて、白きものと換ゆ。

ほどなく僧正のましますとて皆々形をあらためて

坐す。僧正來れり。瘦せたるかたなり。

白き法服をまとい玉ふ。讚美歌、聖書朗讀、祈禱
 了りて、僧正のすゝめあり。神のめぐみを説き玉
 ふ御聲、高からねども力あり。手をあげて、天を
 指し玉ふとき、満座アーメンの聲いとしめやかな
 り。
 讚美歌の聲のうちに長老と僧正かへり玉ふ。一同
 寢臺のそばによりつどひて、また泣きはじむ。夕
 がた葬儀會社の馬車再び來る。明日は百哩はなれ
 し故里の墓地に葬むるよしにて、棺にをさめんが
 ためなり。銀にてところどころ飾れる長方形のは
 こに入らせ玉ふ。桃色の絹布團あたゝかにも見ゆ
 れど、氷よりもつめたき御手は苦の下に何をか携
 へゆき玉ふべき。御顔のところは玻璃の窓ありて
 御胸のあたりまで見え透く。上衣の襟に、白薔薇
 をかざし玉へり。あはれ露を帯びたる花にはまだ

命あれど、かざせるその人は、御魂なきのむくろ
 なりけり。
 廿四日。
 午前五時より働きはじむ。旅立つ人々のために食
 事の仕度をせんとてなり。卓につきしは五人。
 なき人の従弟とか、まだうら若き紳士、東部に
 てもの學びせるかたとか、いとみやびたるそぶり
 ゆかし。
 奥様の妹君、紅粉淡くよそひ玉ひて、黄金色の髪
 フランス佛蘭西ぶりにぞ束ね玉へる。且那樣のすぐ下の弟
 君、田舎にて農業營み玉へるときく、いつも沈
 黙を好ませ玉ふものを、けふはわけてさみしげに
 見うけらる。その妹なる夫人は喪服の上に十字架
 を帯び玉ふ。奥様は泣きはらし玉ひしお眼いと赤
 く、いつもの御容色あともとゞめず、いたましげ

なり。

やがてまたかの葬儀會社の馬車來る。いよ／＼且
那樣は家庭を見捨て玉ふことか、奥様の慟哭し玉
ふ御聲、わが胸のそこを刺すやうにて、危くも手
にもてる皿を落とさんとせり。馬車の影見ゆる間
一同門に立ちて名残りを惜しむ。

七時十分、自動車にて奥様はじめ一同旅立ち玉
ふ。おさんはひとり留主居して、家の中とりかた
つけ、洗濯ものなどす。

夕かたより雲のけしきたいならず、またもしぐれ
んとすらん。さだめなき空。さだめなき浮世。了

東様に 申上候

浅草山之宿町十九、東光社より發行せる

「東光」と云へるにも原稿送り有り候

御序もあらば御らん被下度候

四十八

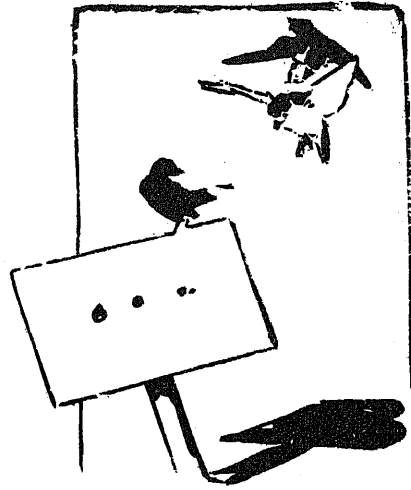
魂のゆくゑ(九月)

メイキベツド(十一月)

はかに、お菓子、友光、浄土、師の面かげ、など
送り居り候

例の偏狹なる宗教觀、御恥かしく候へど三尺坊
は大入道たるべからず御一笑被下度候





保育問答

家事及教育に關する御質問は何でもよろしい
質問は端書にて表記は左の通りに願ひます

女子高等師範學校附屬幼稚園内

フレール會編輯員中

「問」幼稚園に備付くべき恩物以外の玩具は如何なるものを要しますか、

「答」充分を云ふと限りがありませんが、先づ木製の鋤、麻繩、(綱引にも用ゆ)輪、毬、旗、御手玉、人形、ま、ごと道具、等が必要でせう、木製の鋤と云ふのは、長一尺五寸許りて砂場を掘る爲めのものです、これは最もよい玩具で、成るべく澤山ある方が宜しう御座います、其他のもも数は人數に相應して澤山要るだらうと思ひます、尙雨天などで、室外の遊びを妨げられた時の用意に繪本なども適當でありませうから適當に集めなければなりません男の子などにはお假面なども備付けては何うかと思ひます

「問」知人の女兒五才になり候が、兎角内氣にて幼稚園に參り候ても、引立たず、折々は欠席せんことを望み居り候、如何にせば陽氣に相成り候や 伺上候

「答」第一には食物と胃の腑に注意しなければなり

ません、胃が丈夫で營養が良好ならば、活力

は充分に出来ますから、そこで成る可く運動す

る様に仕向けて、身体も精神も疲勞を覺ゆる位

に活動させた上、夜は早くから安眠させて、充

分熟睡する様になさい、そして同年位の初めは

餘り活潑過ぎぬ子供と一所に遊ばせ、成る可く

戸外にさわぎ回はらせる様になさつたら効果

あるだらうと思ひます、そして御両親は暇にま

かせて、一所に所々を散歩し、知人の家を訪問

なさることが宜しいと思ひます、

「問」某書に子供に與ふる玩具は少い方がよい、多

いの有害だとありましたが何う云ふ理由で御座

いますか、

「答」玩具の多いのが、必ずしも悪いのではありま

せん、一時に多く與へるのが悪いのですから、

一つの玩具を與へて、其を喜んで倦る迄玩

んだら、又外の玩具に取りかへて、常に適切な

玩具を與へて遣ることは必要であります、併し

考のない人には子供に何時新奇な玩具を與へて

よいか、解らないでせう、然れど若し注意して

子供を観察して居れば或玩具に因つて子供が出

来る丈一部の精力を費して稍疲勞を覺えて來た

頃即ち其子供の興味が一玩具に充分に拂ひ盡さ

れた頃合が歴々とわかりますから、そしたら直

に他の方面に其興味を誘ふて新な遊びなり玩具

なりを與へることが必要であります、斯様にす

るならば玩具は成る可く多くあるのがよいので

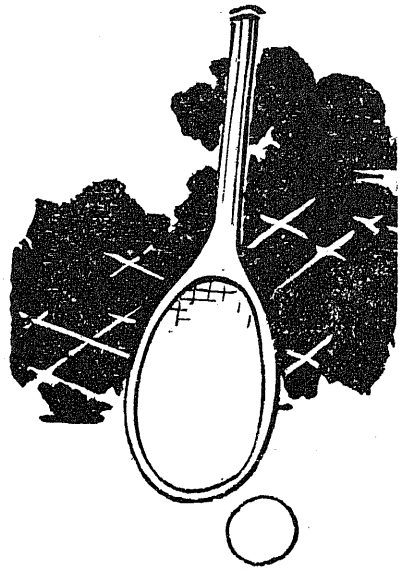
決して少くてよいとは申されません、唯一時に

無暗に多くの玩具を與へて子供の活動の如何と

云ふことを考へないのは不經濟の事でありませう
 「間」近頃某雜誌にて幼稚園の有害なる由、記し有
 り候果して左様のものに候や婦人と子供紙上に
 て御教示下され度候

「答」一利一害は數の免れぬもので家庭にての良兒
 が學校へ行く様になつてから不良の習慣を得た
 ることや、田舎の良童が都に遊學してから遊治
 郎と化せし例は決して尠からぬ事で各個一人
 づつに調べたら色々損して居るものも得して居
 る者もあるでせう、其損した側から見れば學校
 の入學も都への遊學も止めるが得策でせうし、
 益した側から見れば逆も他に比べものない位、
 善いと思ふでせう、幼稚園の利害も同じ様で、
 種類や階級の異なつた家庭から一人二人と集め
 たのですから其一人づつに就て調べたら利害得

失色とあるでせう、若し其得る所の利益が然し
 たるものでもなく家庭でも容易に得らるゝ様な
 ものである上に其害が全く幼稚園から來たもの
 と鑑定が着いたらば其は無論幼稚園有害論の論
 據となるでせうが、果して此の通りの断定が出
 來ませうか、吾々は疑つて居ります、殊に吾々
 の見る所では幼稚園出身兒童の成績は概して他
 に比して良好であるのを見ると確かに有益と見
 ることが出来る、然らば無害と云ふ點は何うか
 と云ふに此點に關しては害否何れ共今茲に断定
 することが出来ない何となれば現今我國中に於
 ける悉皆の保姆が全然完全だとの保證を下す
 とが出来ないからでありませう



▲幼稚園内の花園

近來學校園の設備が盛に唱導

されるのは結構であります。が之は當に學校のみならず、家庭にも幼稚園にも必要であることは曾つて本誌にも女子高等師範學校の竹島先生が述べられたので、明なことでありますから讀者諸君も定めし御實行の事だらうと思ひます、併し中には、花、野菜の種子がなくて御困りの方もあるでせうが、其云ふ方は左記の特志家へ申込まれたらば宜

しかろうと存じます、

歐米各國に於ては、夙に之れが施設の行はれつつある所謂學校園なる者の、教育上如何に裨益を興ふるものなるかは、等しく教育社會の認むる所、而して吾人農藝界に身を措くものの上より見て、この學校園なるものの獨り直接教育上に効果を興ふるのみならず、亦間接に農藝の進歩發達に向て、尠少ならざる裨益を興ふるものなることを感ずるものなるが故に、大に之れが普及を渴望するものなりしが、願みて本邦の有様を見るに、極めて僅少の學校を除くの外、未だ冷れく之れが設置を見るに到らざりしは、本邦教育上の大欠點として吾人の甚だ遺憾に感ぜし所なりき、然るに今や文部省に於ても、大に之れが設置を奨励せらるることとなり、これよりして漸く之れが普及を見んとするの氣運に向ひつつあるは、吾人の實に欣賀措く能はざる所とす、吾人微力なりと雖、本邦農藝の革進に向て致て全力を捧げんとするもの、從て吾人の目的を達する上に於て、少なからざる裨益を興ふる學校園なるもの普及完成を祈るの情や切なり、依て聊か吾人の微衷を表せんが爲め、既に之れが設備を有せらる、學校、及び將に設けられんとする各學校に對し各地方に適する、珍奇有益の草花蔬菜類の種子をば、無料にて贈呈せんとす、御希望の向は其旨御申越相成らば吾人は喜んで費命に應ずるものなり、

明治廿九年二月 埼玉縣北足立郡神根村西新井宿三十一番

日本農藝革進會主任 小野寺行三

▲地方の幼稚園

近來地方に幼稚園の勃興するも

の多く、保母の需用も從て増したる様なり、聞く所に因れば近くは横濱遠くは韓國仁川より招聘の紹介などもある由、我保育事業の爲め慶賀す可き事共なり、而して其多くは園長若くは保母長たる人を求め來る所を見れば未だ地方には中等教育を受けたる婦人の保育事業に従事するものなしと見ゆ、是は畢竟幼稚園の地位高からざるに因る可しと雖も我幼稚園界のためには頗る遺憾なりと云ふ可し、一躰保育事業の性質たる普通學術の素養ある婦女子を要するは明かなる事にして其事業の神聖にして高尚なること云ふ迄もなければ地方の高等女學校卒業生は奮つて保育法を研究し婚嫁前兩三年間此「小天園」に遊ばんことを切に余輩の勸むる所なり。

▲函館本願寺の幼稚園 北海道函館市なる本願寺

別院にては院の事業として七千圓の大費を投し巨然たる幼稚園設定の計畫ある由にて目下人を東京に派して設計調査並に保母長たる可き人を求めつゝありと云ふ寺院としては誠に恰好の事業にして近來の美舉と云ふ可し、聞く所に因れば將來益進みて尋常及高等小學校並に高等女學校を創設する目論見の由、壯なりと云ふ可し、同地方は氣候稍寒しと雖も我國中に於て最良なる健康地の一にして外國の使臣なども同地駐在を喜ぶ程なれば、意氣ある婦人は行きて我北海の愛兒を掬育す可きなり。

▲保母養成所 豫て東京市神田區一ツ橋幼稚園内に設けられたる東京保母養成所にては又々第三回の講義を開く由にて規則を發表せり、左に録するもの之なり。

東京保姆養成所規則

- 第一條 本所ハ幼稚園保姆ヲ養成スルヲ以テ目的トス
 第二條 修業年限ハ六ヶ月トス
 第三條 授業ハ毎日午後三時三十分ヨリ六時三十分迄トス
 第四條 學科課程及教授時間左表ノ如シ
 學科課程教授時間表

學科	每週授時間	課程
修身	一	人倫道德ノ要旨
教育	三	教育ノ原理、兒童學
保育法	六	保育ノ方法及實習
國語	一	講讀、作文、談話
理科	二	通常ノ天然物ニ自然ノ現象人 身生理衛生ノ大要
圖畫	一	自在畫、用器畫ノ初歩
音樂	四	單音唱歌、樂器用法
合計	一八	此他課外講演及實地練習ノ時間ハ 其都度便宜之ヲ定ムルモノトス

- 第五條 本所ニ入學シ得ヘキ者ハ修業年限四ヶ年ノ高等小學卒業
 ノ者若クハ之ト同等以上ノ學力アルモノタルヘシ
 第六條 試験ハ修業年限ノ終ニ於テ之ヲ行フ
 第七條 授業料ハ一人一ヶ月金壹圓五十錢トス
 第八條 入學セント欲スルモノハ履歷書及入學金五拾錢ヲ添ヘテ

申込ムヘシ

神田區表神保町一ツ橋幼稚園構内

東京保姆養成所

電話本局一三九四

講師 女子高等師範學校教授 兼附屬幼稚園主事 中村 五六

外 數 名

▲女子高等師範の保姆實習科 前項の養成所は専ら學術の講義なれども來る四月より女子高等師範學校内に設けらるゝとか云ふ保姆實習科は該校附屬幼稚園内にありて専ら保育の實際を練習するもの、由にて入學志願者の資格は女子師範學校、師範學校女子部及ひ高等女學校(修業年限)の卒業生若くば之と同等以上の學力あるものに限リ、且其定員も僅々八名に過ぎざれば目下保姆の需用には間に合はざる可し。

▲私立岡山盲啞院の設立 岡山縣盲人會にては、

先般の戦役に際し、失明者百五十餘名の多きに及べるに同情を表し、今回標題の盲啞院を設け、普通教育並に實業教育を施さんとする由、誠に欣ぶ可き舉なりと云ふ可し、吾人は此の如き舉の益々多からんことを望む。

兒守の春遊に就て

醫學博士　三島通良氏の談

左の一篇は婦人衛生雜誌に載せられたるものなるが有益なるものに付茲に轉載することとせり毎年つねねんの事ながら元日げんじつ來屢々らゐらゐ見受くるは兒守こもりの嬰兒えいじを脊負せせひたるまゝ追羽子おひ手毬てまりつきをなし居ることにて世の母親は之に對し何等の注意も懸念も有せざるが多けれど、若し仔細に彼等の振舞を注視せば、寧ろ危險にして一刻も其注意を怠る可らざる

ものあり、何となれば兒守等は追羽子に夢中にて背負へる小兒の事は更に其念頭に上さず、然るに彼等の羽子をつく度に背上の小兒は頭を前後左右に振られ、最初は不快なるに堪へずグズグズといへども、遂には心神朦朧として睡眠を催し來り、愈々頭を振らるれば、時々驚きて目覺むるなど姑らくも安靜を得ず、此の如きは往々腦振盪を招き、又單純性腦膜炎の因をなし然らざる迄も腦の疾患に罹り易からしむ、彼の夜驚症乃ち夜泣きなどいへることの原因は何れも之等に基するものなり又手毬つきも之は腦の疾患にはさのみ原因たらざるも兒守等は只だ毬の方にのみ氣を取られて次第に打かゝめるより、自然背上の小兒は胸部を壓迫せられ、爲めに往々胃、肺、心臟等の病を醸すことあり故に子を持つる母親は常に之等の點に注意

して愛兒の健康を其害せられざるの以前に保持するに努むべきなり

新刊紹介

●「家庭及教育」 全一冊 日本濟美會編

年と共に現はれたる一大著述は家庭及教育とす、

一千二百餘頁に亘る龐然たる菊版の大冊にして躰

裁及製本の美にして且堅牢なると紙質の良好なる

とは出版界近來の珍たる可く發行店主が損失を顧

みざる勇氣は確に認むることを得可し殊に挿畫の

多きは家庭に關する著述としては最も適當なるも

のと云ふことを得、今其内容を通覽するに第一篇

に於ては家庭及教育を總論し第二篇には身体及其

育成第三篇には精神及其養成第四篇には德育及美

育第五篇には精神的病弊及其矯正を論じ殆ど家

庭及教育に關する問題を網羅し盡したり然れど今仔細に其論ずる所を味ひもて行けば未だ俄に高論

卓説と稱するを得ざるが如し否却つて吾人をして

無遠慮に云はしめば單に倫理心理衛生教育等に關

する世の平凡なる諸説を編纂集輯したるに過ぎざ

るものと云ふことを得故に本書の價値は之を約言

すれば只其字彙的なるにありと云ふ可なり、察す

るに編者の意も亦然りしには非らざるか若し果し

て然らば徒に文字を大にし紙數を増加して五圓五

拾錢の高價を拂はしむるは、多少好事の譏を免れ

ざる可し。發行所は京橋區二丁目東海堂

●「田園婦人」 毎月一回廿五日發行

婦人界に田園趣味及農藝上の智識を普及せんと

て興れるものにて趣味ある業をば平民的に眞實に

説きたれば頗る面白く讀まれたり殊に「羊をふ買

ひなさい、「正月花の作り方」等は一入興味あるものなりき。發行所は東京市牛込區東五軒町四十一番地婦人農藝會定價は郵税共一冊金參錢

●礦物界の現象 全二冊 安東伊三次郎著 光風館發行

前に生物界の現象 著はして非常の喝采を博せられた著者安東君は更に表題の書物を著述せられたといふので、先日一部を惠まれた。元來余は此學の方面に多少の興味を有つて、機あらばせめて其門戸を窺つて見たいとは思つて居るのであるが、悲しいかな夫すら出来ないで、全く門外漢であるから、折角の好意に對し専門的に批評などするとは如何しても出来ないのである。

で、多少でも興味をもつてゐるまゝに一部を乞ひ得て讀過した。そして思つた、一體吾々人間は礦物界の中に生息して居りながら、而もこれまで礦物

學といつたら、まことに無味乾燥の様に思つて居る人が多い様だが、かゝる人は此書物に由つて其謬見を全く排除することが出来よう。余は先づ第一に、科學者としての安東君が、從來無味乾燥なりと思はれて居たこの礦物界のことを記述するに極めて流麗な文章を以てせられた文才に敬服せねばならぬ。そして其内容であるが、前篇には我國の礦物界を記し、後篇には世界の主要礦産を記し、其種類、用途、簡易識別法、面白い礦物界の現象等を例の文章で面白く然も明瞭懇篤に指示せられて居る、次には挿繪である、鮮明なる寫眞に美麗なる木版數知れぬ程惜氣もなく挿入せられて、其上産地や何かを指示する爲に、諸所に地圖を挿入せられたのは用意周到謝するの他なし、全文五號活字、所々に六號活字を以て詳細なる説明を與へ、

且つ簡單なる注意事項や、表の如きは本文中別に美的に排列して居る、紙数は二巻併せて三百頁に餘り巻末に索引を附して居る、定價は一部二巻にて一圓七十錢、斯學専門の教師は勿論參考書として缺くべからざる良書であるが、小學校に従事せらるゝ人、夫でなくとも多少でも此礦物といふもの、何たるかを知つて見たいといふ人には、唯一の良書だといふことが出来る。(熊泉)

會報

明治卅九年二月入會者

- 本所區外手町九一開發幼稚園 大田 よね
- 兵庫縣川邊郡東谷村下財 平安新一郎
- 本郷區金助町五 中川 きくえ
- 本郷區湯島一丁目十一番地 小菅 もと
- 赤坂區青山青木町一二齋藤方 杉本 そとえ
- 清國上海日本郵船會社支店 伊藤 美代子

新潟縣北蒲原郡葛塚町大字葛塚三三二
愛知縣名古屋市武平町二丁目
會費領收 自明治卅九年一月二十日 至全 二月廿四日

金額	年	月	日	姓名
一〇〇	三	八	六	野崎 秀
二〇〇	三	七	六	松尾 つれ
六〇	三	九	一	海寶 ちばを
五〇	三	八	七	八田 さだ
七〇	三	八	七	土方 鉞太郎
五〇	三	八	一〇	近澤 岩吉
五〇	三	九	二	西浦 りつ
六〇	三	八	七	高木 萬壽
一〇〇	三	八	一	野原 つれ
一〇〇	三	八	一	小林 ふぢ
一〇〇	三	七	二	松浦 かめよ
五〇	三	八	二	馬場 虎
五〇	三	八	八	室田 美津
六〇	三	八	六	南枝 ちよの
一〇〇	三	八	九	増澤 なみ
二二〇	三	八	三	和知 てる
二二〇	三	七	三	戸上 初瀬
二二〇	三	七	四	村田 きぬ
二〇〇	三	七	五	平野 蝶

一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一	三九、一
三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二	三九、一二
津野良作	南幡彦朝	榎本常	戸田ふじな	團田喜代	若林みつ	勝目かよ	宗秀馬	石原淳	浅田つる	鈴木ぎん	樋口きつ	藤谷い	早川い	山川二葉	星保やま	久保や	久保や	久保や

六〇	七〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	八〇	一三〇	六〇	六〇	六〇	一四〇	四〇	二〇〇	一〇〇	
三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三八、七	三七、一二	三九、一	三八、三	三八、六
三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三八、一二	三九、一	三九、四	三九、一〇	三九、三
箱石孝藏	野津敏江	坂元つや	前田捨松	永地待枝	鍋島いし	榎山常	三谷鏡	岡山秀吉	小林儀	藤村いと	吉武しょう	高橋しげ	石川かれ	水口みつ	古市幸	山田系	加藤常	長興のぶ	大和田りょう	日比恪	大西益	濱冬	井口よ

一四〇 八〇 七〇 六〇 六〇 六〇 六〇 六〇 六〇 六〇 六〇 一三〇 六〇 九〇 六〇 六〇 六〇 六〇
 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一
 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一

津原ちか 尾立とみ 小谷野かね 近藤 羽田 石川よれ 近藤つるよ 菊地徳次郎 佐藤うめ 池袋すが 大野朝比奈 石井國次 三須とし 玉井房之助 江藤みほ 三島つう 新開三枝 村山つね 土取のぶ 田坂りつ 十文字こ と 西村きしえ 池田かほ 藤澤周

四〇 六〇 三六〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇
 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一
 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一 三九、一

武石八重子 武藤梅 武野八重 堀越源次郎 尾田けい 立花はる 斯波やす 山内定治郎 川島庄一郎 小倉みき 立野たかえ 武井とめ 中澤とめ 須藤つね 瀧山幸 原近事 村田米 東茂登 平安新一郎 山村勤太郎 妹尾明 小岩まゐ 高野ちよ 中川きくえ

七〇 三八、九 — 三九、三
 一〇〇 三八、六 — 三九、三
 五〇 三八、一 — 三八、五
 二〇 三八、一 — 三八、二
 二五〇 三八、一〇 — 三九、二
 二〇 三九、二 — 三九、三
 一〇〇 三八、八 — 三九、五
 六〇 三九、一 — 三九、六
 一五〇 三八、一 — 三九、三
 二〇 三八、四 — 三九、三
 一五〇 三九、一 — 三
 一〇 三九、二
 六〇 三八、九 — 三九、二
 四〇 三八、一 — 三九、二
 四〇 三八、一 — 三九、二
 四〇 三八、一 — 三九、二
 六〇 三八、一 — 三九、六
 一〇〇 三八、五 — 三九、二
 二〇 三九、二 — 四〇、一
 二〇 三九、一 — 三九、二
 三〇 三九、一 — 三九、二
 二〇 三八、一 — 三九、二
 一〇〇 三九、一 — 三九、二
 一〇〇 三九、一 — 三九、二

伊藤のぶ
 大倉信
 櫻井光華
 高木すみ
 朝比奈ふみ
 杉本そとえ
 西本きみ
 石幡とみ子
 森本たみ
 中川よれ
 伊東みよ子
 小菅もと
 金子まさ
 伊東弘一
 喜多見佐喜
 佐方鎮
 土保かん
 小林ませ
 田村梅
 上野賀久子
 阿野純子
 横山榮次
 杉野四男次郎
 堀越源次郎

一〇 三九、二
 四〇 三八、一 — 三九、二
 四〇 三九、一 — 三九、二
 一〇〇 三八、六 — 三九、三
 四〇 三八、一 — 三九、二
 六〇 三八、九 — 三九、二
 二〇 三八、一 — 三八、二
 二〇 三八、一 — 三八、二
 四〇 三八、一 — 三九、二
 四〇 三八、一 — 三九、二
 四〇 三八、一 — 三九、二
 四〇 三八、一 — 三九、二



立花はる
 町田則文
 高橋忠次郎
 中村しん
 鳥居鯨三郎
 富岡龜門
 下田二郎
 山口西三郎
 下村三四吉
 林 繁
 谷田部 順
 波多野とく

本誌
特色

理屈云はず實用ばかり
優しい文章で面白い書方
質問隨意返事は分るまで

それはく實に

親切な雑誌

一冊讀んでござらんない!

第二卷
第三號
三月一日發行

明治の家庭

定價一冊六錢
六冊郵税共三十三錢
一年分六十錢
郵券代用一割増

●はいどうく……………口 繪
●幼児の時から宗教心を養ふの
可否……………佐藤潔 高島平三郎 宮田修 中島徳
元 眞次郎 大内青樹 留岡幸助

●出産の時の婦人の心懸け……………老 産 婆
●湯に入る順番と子供の躰方……………梓 柳 生
●子供がけがをした時……………ドクトル 青木大勇
●模範の青年(下)……………紅 童
●女中を叱つて主人にお目玉……………春川 久子
●子供の育て方(質問澤山)……………
●奥さんの落ちどさがし……………痴 狐

●子供はなぜに馬を好むか……………岸邊東洋幼稚園長
●動物を可愛がるお伽噺(二等賞)……………近 藤 箕 溪
●子供の輕便なもゝひき……………福田とし子
●花見ずし……………成女學校講師 松本常次郎
●献立問答……………(懸賞)
●料理天狗
●可愛らしい話
●よろづ問答
●お伽噺懸賞募集(金拾圓)

發行所

東京市牛込區
納戸町六番地
明治の家庭社

發賣所

東京日本橋區
本石町三丁目
寶文館
電話本局
二三一三

心の花



編輯主幹 佐々木信綱



第十卷第一 (二月一日發行)

- 鯛牛庵雜筆
- 佛典の中の花
- 機械(小説)について
- 竹取(小説)
- 村役場(小説)
- 印度古詩
- 鵜飼島詩
- 喜劇新式教授法
- 踏歌節會の故事
- 萬葉集中の花
- 桂園一枝管見
- 良ちやん管見
- 戲曲の成就
- 邦人の能力
- サシタクハツ
- 狂吟(短歌)
- まほろし
- 凱旋(脚本)
- 嫁入車(小説)
- ひかり(短歌)

△定價一冊郵税共拾參錢

△日本橋區本石町一ノ一

竹柏會出版部

文學博士 文學博士 文學博士 文學博士 醫學博士 文學博士 文學博士 文學博士 文學博士 文學博士

幸田露伴 姉崎風葉 小栗道史 坪内逍遙 夏葉女史 上野古史 小澤山内 藤杉古史 小盛 鴻巣盛 井上通泰 小内八千代 吉岡向陽 沼波瓊音 長岡紅瓊 川田順雪 金子南冥 新井雨泉 大塚楠緒 佐々木信綱

フレーベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ケ
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ隨出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參列品幼兒成續物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
 - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 一 雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ケ
 - 會長 一人 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期チ二ケ年トス但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ待ス

謹告

戦後の教育的經營は女子教育と幼児教育との發展に俟つこと切なり。而して本會は實に其指導者たる可き重責を荷ふ。従つて其機關雜誌たる本誌は年と共に其内容を精選し、今又大に改革を實行せり。讀者諸君希くば益々自重自信以て我保育界の爲に盡されんことを。

フレーベル會

